

Architecture
Product
System



脚本

コトバを食べる、ケモノ。

言喰怪獣

遠い、遠い、未来の話。

山の森の中にぽっかりと広間が開けていて、そこにいくつもの家々が建っていました。

中心には駅舎があって、まわりには喫茶店があったり、おスシ屋さんがあったり、眼鏡屋さんがあったり、なんだかうまくいえないけれど、いろいろあって、病院なんかもあるんです。

その病院の病室に、駅員さんの息子の兄弟の、お兄ちゃんがベッドで寝込んでいました。

まわりには、駅員さんと奥さんと、兄弟の弟くんが、寝込んでいるお兄ちゃんを心配そうに見守っていました。

「お兄ちゃん、元気になって、一緒に遊ぶ約束だよねえ」

そう聞かれると。寝込んで苦しむお兄ちゃんは、弟くんに微笑んでうなずきました。

看護婦のミナ子さんが、様子を見に来て、お兄ちゃんの具合を見ると、

「大丈夫、とても治るのがむずかしい病気は、きっと治るわ」

と、言ってくれました。

駅員のお父さんは、弟くんの両肩を抱いて、お兄ちゃんにそっと語りかけました。

「今日はこれで帰るけど、また明日も来るからね、お兄ちゃん」

そういうと、みんなは病室に出て、廊下を歩き、うさぎのぬいぐるみを持った女の子とすれ違いました。

お父さんは不安そうにしている弟くんに話しかけました。

「いいかい、今日はお前はおばあちゃんのところに泊まるんだ。お兄ちゃんはとても治るのが難しい病気だから、お母さんがずっと付き添ってあげなくちゃならない」

そういうと、忙しそうに、病院を出て行き、お父さんは駅に向かいました。まだ、仕事があるのに、駅を抜け出してきたのです。

弟くんはお母さんに連れられておばあちゃんの家に行き、おばあちゃんが作ってくれたシチューを食べました。でも、とてもお兄ちゃんのことを心配で、シチューを食べるところではありません。いつもはおかわりしてしまうシチューを残してしまいました。

夜遅くなっても、眠れません。

お兄ちゃんのとてつ治るのが難しい病気が早く治ってほしいとばかり、思いました。

その晩、お兄ちゃんのところ、誰かがやってきました。でも、お母さんは眠っていて、誰かがやってきたことに気づきません。

その人は男の人のように、女の人のようにもありません。

「迎えにやってきましたよ」

そういうと、その人はお兄ちゃんの頭をなでて、笑いかけました。

「君はまだ、約束を果たしてないね。でも、きっと、いつか、いつの日か、約束を果たす日がやってくるよ」

なんだか、お兄ちゃんは今まで苦しんでいたのが、嘘のように楽になりました。

その人が頭を優しく何度もなでるたびに楽になっていきました。

次の朝、お母さんは目覚めると、お兄ちゃんが亡くなっていることに気づきました。

大急ぎでお父さんとおばあちゃんのところにいる弟くんにお兄ちゃんが亡くなったことを知らせ、それからお母さんはさめざめと泣き出しました。

その日は家族みんなでお兄ちゃんのお葬式をしました。

弟くんは鼻をすすって泣いてばかりいました。

お父さんはふさぎこんではいましたが、気をとりなおして、こういいました。

「悲しいけれど、生きていかなければ、いけない」

そして、お父さんは遠い国にいる弟さんに、兄弟にとっては叔父さんにあたるその人に、お兄ちゃんが亡くなったことを伝える手紙を送りました。

お葬式をしてから、幾日が過ぎ、弟くんのもとに、荷物が届けられました。

手紙と荷造りされたダンボール箱です。

それは遠い国にいるイサオ叔父さんからの贈り物でした。

弟くんは、手紙を読み始めました。その横で、ダンボール箱が中になにかいるように、ガサゴサと動いています。

「弟君、お兄ちゃんが亡くなって悲しいね。

けれど、元気を出すんだよ。

荷物の中身を空けてごらん。

中身のそいつはとても、愉快的なやつだ。

きっと、元気をわけてもらえるぞ。

そいつはケモノだけど、仲良くしてやってくれよな」

そいつとは、何でしょう？ ケモノとは、何でしょう？

そんなことを思い浮かべた弟君は、やっと、ダンボール箱がガサゴソ動いていることに気づきました。

早速、弟くんは荷造りを解いて、ダンボール箱を開けてみると、中から、ケモノが飛び出してきました。

それには弟くんは、ビックリして、おどろきました。それで、飛び出してきたモノをまじまじと見ました。

ケモノはフシギな生き物でした。

とても小さいクジラの赤ちゃんのヒレが、手になって、その生き物に足が生えているような、なんというか、ともかく、ケモノです。

シッポがある四足のクセに、後ろ足で立ち、真ん丸い目で、弟くんを見つめています。

思わず、弟くんはたずねました。

「キミは誰？」

「ケモノです」

ケモノはすぐに答えました。そして、弟くんを驚かせました。

人間でも九官鳥でもない生き物なのに、しゃべることができたのです。

「変なのが、しゃべった」

「変なのじゃないよ。ケモノだよ」

オドロキです。「変なの」は口答えまでしました。

しかし、弟くんにとっては、ケモノと名乗る「変なの」に変わりありません。

その「変なの」は尊大に雄弁に語るように、弟くんに言いました。

「ケモノはケモノであってね、ケモノなんだよ。だから、ヘンナノじゃないよ。だから、ヘンナノなんて、よばれたくないよ。キミこそ、いったいなんなんだい。キミはヘンナノなのかい？ケモノの名前はケモノだけど、キミの名前はなんていうんだい？」

困りました。ケモノはちょっとオーボーです。屁理屈を言っています。でも、弟くんは素直なところがあるので、ケモノに自分の名前を教えるのは、今後のことを考えても、いいことだと思いました。それで、弟くんは自分には名前があるのに、みんな名前と呼ばないで「オトウトクン」と呼ぶので、今度も「オトウトクン」と呼ばせればいいと思いました。

「ボクはみんなに、オトウトクンと呼ばれているから、キミもオトウトクンと、ボクのことを呼べばいいとおもうよ」

「ボク？ オトウトクン？」

「そうそう、ボクをそう、呼べばいいから」

「ボクがオトウトクン？」

「違うだろ。キミはケモノだろ」

ケモノは横に長い口をもっと、長くして、人間さんで言えば、笑ってる顔を作りました。弟くんは、ケモノという生き物も、そんな表情を作るのかと思いました。

「ケモノは、ケモノだね、オトウトクン」

弟くんは、いつの間にか、ケモノを「ヘンナノ」とは思わず、ケモノと思っていました。それをケモノに見透かされたのです。

なんて、イヤなヤツでしょう。ケモノは。

人の行動を見透かして、わざと「ボクがオトウトクン」なんて言って、弟くんに「キミはケモノだろ」と、ケモノをケモノと認めることを、言わせたのです。大人さんで言えば、「ユードージンモン」のようなことをしたのです。こんなことをするヤツは、たいがい、性根の腐ったやつです。たしかに、そういう意味では、ケモノは獣でした。

ところが、はたとケモノは思い出したように、聞きました。

「あなたがオトウトクン？」

「そうだよ。ボクがオトウトクンだよ」

「キミが、あのオトウトクン！」

「そうだよって、言っているじゃないか」

「わあい」

とって、ケモノは弟くんを抱きしめました。

大変です。弟くんはいきなり抱きしめられて、おどろきました。だから、もがいて、ケモノのハウヨウから逃げようとしたのですが、逃げられません。

「オオキイヒトの、オイッコのオトウトクンさん」

「なんだ、なんだ、離せ」

「それでは話します。この度はオニイチャンさんが亡くなられたそうで、ごしゅうそう様です。オクヤミ申し上げます」

何か、ケモノの言うことは、変でした。

笑顔で「お悔やみ」をいうのは変ですし、「オトウトクン」にさん付けするのも、「オニイチャン」にさん付けするのも、変です。でも、ケモノはそんなことには、おかまいなしです。

だって、ケモノですから。

出かけていたお母さんが、帰ってくると、ケモノを見て驚き、イサオ叔父さんの手紙を読んで、あきれました。

「イサオくんは、いつも、こうして、みんなをびっくりさせるのよね」

という、お母さんはケモノを送りつけてきたことには、怒っている様子はありません。

「そんなことより、ケモノをどうするの？ 遠いところにいるオジさんのところに返すの？」

「できれば、そうしたいけど、イサオくんが帰ってくるまでの間、このケモノさんをうちで預かっておきましょう」

それを聞いて、ケモノはシッポを振り、これは犬とおんなじようです。

「でも、手紙にはケモノをどうしたらいいかなんて、ひとことも書いてないよ」

「ケモノさんは、しゃべれるのでしょうか？ ケモノさんに聞けば、いいんじゃないかしら？」

弟くんは、ケモノの顔をうかがいました。まるーい黒い目が、弟くんを見返しています。

「ケモノは、うちに、いたいの？」

「はい。オトウトクンの御宅にいて、オトウトクンを励ますよ」

目を輝かせながらケモノはいい、弟くんはなんて迷惑なことをする気なんだろうと、思いました。

元気になることなんて、励まされなくても、一人でだって、できるやい。

元気なんて、分けてもらえなくたって、元気になれるやい。

こうなると、叔父さんにケモノを押しつけられたようで、仕方ありません。

「ねえ、オジさんの住んでる、おばあちゃんちに、預けられないの？」

「おばあちゃんのところは、今、おばあちゃんしかいないでしょう。おばあちゃんが一人きりだから、誰がケモノさんの面倒を見るの？」

お母さんは、弟くんに、諭すようにいいました。

「えっ？ ボクがケモノの面倒を見るの？」

「よろしくね。オトウトクン」

ケモノはずうずうしく、そんなことをいうので、弟くんは面白くありません。

「そんなあ。ケモノの面倒って、何をするのさ。面倒をしたら、僕の元気がケモノにとられちゃったりするかもしれないじゃないか？」

「そんなこと、ありません」

ケモノはふてぶてしく、そんなことをいうので、弟くんはさらに面白くありません。

「ケモノは弟くんを励まして、元気にします。元気になるれば、メンドウなんて、どうってことありません」

「ケモノさんも、こういっていることだし、ケモノさんの面倒は、あなたが見るのよ」

「面倒って、何をすればいいのさ、お母さん」

「とりあえず、ご飯かしらね」

そういうと、お母さんは、台所に行って、ご飯の支度をしに行きました。

「ケモノは何を食べるの？」

「コトバです」

「コトバ？」

「はい、コトバを食べます」

そんなものを食べて、ケモノは生きていけるのだろうか、とも、ケモノのご飯はそんなものでいいのか、とも、弟くんは思いました。

「本当に、コトバでいいの？」

「はい。ホントーのコトバを食べたいな」

「じゃあ、ボクのコトバを食べてこらんよ」

「はい、それじゃ、コトバをしゃべってください」

そういわれると、なんだか、弟くんは迷いだしました。「コトバをしゃべろ」といわれても、いったいどんなコトバをしゃべればいいのかと、考えてしまうのです。そんな、いいコトバはあるのかなあ、とも思います。そういえば、叔父さんは遠い国に行っていて、その国は南の国で、きっとそこにケモノは住んでいたのだろうと、思いを巡らしました。

南の国に住んでいるとしたら、これだと、弟くんは思いました。

「バナナ」

と、弟くんがいうと、ケモノは、何かをむんずとつかむ仕草をして、大きく口を開いて、つかんだらしいものを口に入れました。

そして、急に、ぺっ、ぺっと、なにかを吐き出しました。

「これ渋い。ホントーのコトバを食べさせてください」

弟くんは、どうしてだろうと、思いました。

バナナというとき、バナナを食べるときに食べる、あの部分の渋い味を思い出していたのです。

今度はあの渋い味を思い出さず、もう一度、バナナと、いってみることにしました。

「ば、バナナ」

ところが、バナナの渋い味が、心に残ってしまって、離れません。

また、なにかを、食べたケモノは、ぺっ、ぺっと、なにかを吐き出しました。

「渋くて苦い。ホントーのコトバをしゃべってください」

弟くんは、今度は、南の国のニガウリを食べたときのことを、なぜか、思い出してしまってい

ました。だから、ケモノが苦いといったとき、どうして、ボクがしゃべったときに思い出した味がするのだろうと、思いました。

「ホントーのコトバをしゃべってください」

さっきから、ホントーのコトバとばかり、ケモノがいうので、弟くんは、ホントーのコトバって、なんだろう、自分がしゃべったコトバは、ホントーのコトバじゃないのか、じゃあ、ホントーのコトバってなんなんだろうと、いろいろ、考えました。

「ホントーのコトバってなんだい？」

「ホントーのコトバだね」

「それじゃあ、わかんないよ。くわしくホントーのコトバについて、教えてよ」

「ホントーのコトバは、ホントーのコトバだから、ホントーのコトバなんだよ」

弟くんは、怒り出しました。

「それなら、ボクがしゃべったバナナはホントーのコトバじゃないっていいのか？ それならホントーのコトバって、なんだい？ ホントーのコトバなんて、ないんじゃないのか？」

「そんなことはありません。オトウトクンこそホントーのコトバをしゃべってください」

「だから、ホントーのコトバなんて、なんなのさ？」

「ホントーのコトバです」

「そんなのどうやっていうのさ」

「誰でも、ホントーのコトバはいえます」

「嘘だ、嘘だ。ホントーのコトバなんて、いえなくて、ボクがコトバをしゃべっても、ホントーのコトバじゃないじゃないか」

「そんなことはありません。ホントーのコトバをいってください」

「バナナ！」

また、ケモノは目の前に何かがあって、つかみとり、それを大きな口を開けて食べました。

しらじらしいと、弟くんは思いました。

きっと、こいつは嘘をついているんだ。コトバを食べるなんて、コトバをしゃべれるから、嘘をついているんだ。

また、ケモノはペッと、なにかを吐き出して、目を潤ませて、いいました。

「ううう。ホントーのコトバ、ホントーのコトバ」

ケモノは泣き出して、顔を涙と鼻水でぐちゃぐちゃにして、うったえかけました。

「ホントーのコトバ、ホントーのコトバ」

弱りました。

泣かせるつもりは、ありませんでした。

でも、ケモノは目から涙を飛ばす勢いで泣いて、うおんうおんと、えづいてしまっています。

そんなところに、台所からお母さんがやってきました。

弟くんは、何か大切な物を壊したところを見つけられたときのような気分になりました。

ケモノが泣いているところに、出くわすと、お母さんは、動じずにケモノを抱き上げ、あやしはじめました。さすが、大人さんです。

弟くんはその姿を見て、ケモノは思ったより小さく、お兄ちゃんとおなじくらいの大きさしか

ないと、わかりました。

「いったい、どうしたの？」

「お母さん、ケモノは、コトバを食べるっていうんだ。それで、ホントーのコトバを食べさせてくれっていうんだけど、ホントーのコトバなんて、知らないから、どうしたらいいか、わからないんだ」

「ホントーのコトバねえ……」

うううと、泣いているケモノの頭をなでて、お母さんは、シアンしているようです。

「コトバというと、取金さんのところね」

「ええー」

お母さんの一言を聞くと、弟くんは嫌がりました。

取金さんこと、取金教授は、この町の大先生です。

でも、弟くんは取金教授のところに何かを聞きに行くのは、不満です。

弟くんは「ホントーのコトバ」のことを知るため、言語学者である取金教授のところへ、聞きに行くことにします。

取金教授の家には助手がいて、弟くんが来ると、読んでいる本から目を離して、ギョロリと大きい目を向け、「取金教授はいますか？」と、弟くんが緊張しながら聞くと、助手は声も出さずにアゴを家の奥に向け、すると、すぐに本に目を戻します。

いつも、こんな対応をするので、弟くんはこの助手が苦手です。

家の奥の取金教授に会い、ケモノの話をする、コトバの国に住む、「言語を食べる獣」の話をし、「ホントーのコトバ」とは、正しいコトバの使い方だと、教えてくれます。

ただ、教えてくれるだけでは、ありません。

「弟君、お前に正しいコトバの使い方を教えて進ぜよう」

と、いって、みっちり「てにをは」について、弟くんに教えます。

「そーんなことも、わからんのか！」

と、怒鳴られながら。

家に帰ると、弟くんは、ケモノにこんなコトバをしゃべってあげます。

「熟したバナナはとってもおいしい」

そのコトバを食べた、ケモノは喜びます。

「本当の言葉」とは、文法が正しいコトバのことだったのですね。

夕方に帰ってきたお父さんも、ケモノがやってきたことに驚いた次の日、イサオ叔父さんから、手紙が来ます。

「郵便デース」

外から、この声がしたので、弟くんは外に出て、ポストを開けてみると、イサオ叔父さんからの手紙が入っていました。

早速、手紙を読んでみると、こんなことが書かれていました。

「弟君。大事なことを書き忘れてしまった。

なにしろ、ケモノをすぐに郵便屋さんに小包で送らなくちゃならなかったから、ケモノの食べ物を書いてばかりいて、弟君の手紙に大事なことを書き忘れてしまったのさ。

ケモノはコトバを食べて生きている。

これなしには、生きられない生き物なんだ。

ケモノは、ホントーのコトバって、言ってないかい？

ホントーのコトバでないと、ケモノはコトバを食べても吐き出してしまいうんだけど、これはまずい料理を食べても、人間が吐き出すようなものなんだ。

だから、料理が正しく調理されていないといけないように、コトバも正しく調理されていないといけない。

ホントーのコトバとは、正しいコトバの使い方をしている、コトバなんだ」

ここまで、読んで、弟くんは歯がゆい気持ちになっていました。「それをもっと早く言ってよ」と、言いたくなりました。

手紙には、まだ、続きがありました。

「ケモノを小包で送るとき、たくさんコトバを紙に書いた。

小包の中にそれを入れておけば、ケモノは腹を空かせない。なぜなら、ケモノはコトバが書かれた紙も食べるんだ。

今、僕がいる、コトバの国では、たくさんコトバのごちそうをいただいている。いつか、そのコトバを書かれたハッパを弟君に見せてあげよう」

弟くんは、はた迷惑だなあ、と、思いました。それから、うちの中に入って、昨日送られてきたダンボール箱の中を調べると、紙切れがいくつか、見つかりました。

「なんか、書いてある」

手に取った紙切れに書かれたコトバを、弟くんは声に出して読みました。

「それは、なんだか、悲しくって、食べなかった」

と、ケモノはシッポを振って、ついでに腰まで振って、弟君に言いました。ケモノのこんな、シッポの振り方は、とっても機嫌がよい証拠です。

なんだか、よくわからないコトバに、弟君が戸惑っていると、お母さんがやってきて言いました。

「さっき、詩を詠んでいたわね？」

「詩って、あの詩のじいちゃんのしゃべる、よくわからないコトバ？」

お母さんは、笑いました。

「まだ、あなたは小さいから、詩の意味をしっかりと知ることができないのよ」

「じゃあ、この詩はお母さんなら、わかるの？」

と言って、弟くんは紙切れをお母さんに渡しました。

お母さんは紙切れを黙読すると、黙読とは声に出さずに文字を読むことで、声を出さずに読むと、弟くんに紙切れを渡しました。

「これはやっぱり、神坂さんのおじいさんのところへ行って、聞いたほうがいいわね」
そう、お母さんににっこり言われると、弟くんは何も言い返せません。

ケモノと連れ立って、神坂さんのお宅へ行き、神坂さんの白いヒゲのおじいさんこと、誌のじいさんに話をすると、連れてきた変な生き物を怪しみながら、弟くんのもってきた詩を読むと、

「おお、これはサトウハルオの詩、『赤子泣く』だ。いったい、どうしたんだ」

と、詩のじいさんは驚き、弟くんはイサオ叔父さんが、紙切れに詩を書いたことを伝え、それから、ケモノの紹介と、そのケモノのために、詩を書いたことも伝えます。

すると、詩のじいさんの孫の俳句の兄ちゃんこと、イナゴさんが現われ、

「なんだ、この変な生き物は！」

と、ケモノに驚きながらも、ケモノに会った驚きを句にして、披露します。

どうせなら、短歌の父ちゃんこと、詩のじいさんの息子で、イナゴさんのお父さんのところにも、行こうということになり、未亡人のおリツさんの営む、喫茶店メロディにみんなで行きます。

そこで、短歌の父ちゃんは、おリツさんをくどこうと、詰まらない歌を詠んで困らせています。

その歌をケモノに食べられて、「まずい」といわれて、短歌の父ちゃんは落ち込みます。みんなは、笑って、それから詩や句を詠んで、過ごします。

シマザキトウソンの『流星』や、サイトウサンキの「黄林に 玉のごとしや 握り飯」と、いろんな詩や句が呼ばれる中、「ミナ子はいつまでも、イサオくんを待っている」というコトバも飛び出して、なんだか、楽しい時間は過ぎていきます。

数日して、また、叔父さんから、荷物が届きました。中には緑色のガラス石が入っていました。

その石を眼鏡屋の佐藤さんに見せると、「コトバを見ることができる石」、言視瑠璃石の原石であると、言われます。

その石を通してみると、雲のようなものが見えます。

これは、いったい、なんでしょう？

弟くんは、その石でメガネを作ってもらうことにします。その代わりに、水晶を山に採りに行き、佐藤さんが作るメガネと水晶を交換することにしました。

弟くんが山に水晶を採りに行ったときの話しは、いろいろとあったのですが、一緒にいたケモ

ノがなんとかしてくれたので、水晶の塊を見つけて、無事にメガネと交換してもらいました。

そのメガネを通してみると、ケモノは誰かがしゃべったときに口から出る、雲のようなものに触れて、綿菓子を食べるみたいに食べていたことがわかります。これには、驚いた。

そんな、ある日、弟くんは誰かの落とし物の布切れを拾い、横山さんちの雑種犬ダイジロウに匂いがかがせて、落とし主を探そうとしますが、ダイジロウは鎖に繋がれて、そこから放れることはできません。前に、お兄ちゃんが同じようになことをしたのを、横山さんが怒って、放し飼いだっただいジロウを鎖で繋いでしまったことを弟くんは思い出します。

そこでケモノは、ダイジロウに白い布切れの匂いを嗅がせて、ダイジロウが「ワンワン」と、吠えたときに出した雲をつかみとり、食べてしまいます。

「あのね、ダイジロウはね。あっちに、落とし物の匂いがするって、いってるよ」

弟くんとケモノは、落とし主がいるらしい方へ、駆けていきました。

ミナ子さんは、病院の庭の芝生の上で、女の子にまどみちおの『うさぎ』という童謡を歌ってあげていました。さすが、イナゴさんの妹さんです。

でも、看護婦姿のミナ子さんには、何かが足りません。

そこへ、ケモノと連れ立って弟くんがやってきました。

「これ、ミナ子さんのものじゃありませんか？」

弟くんが差し出した白い布切れを見たミナさんは喜びました。

「あら、よかったわ。なくしてて、見つからなくて、困っていたの」

白い布切れを、弟くんから受け取ると、たたんで折って、何かの形にすると、ミナさんはそれを頭に乗せました。実は布切れはナースキャップだったのです。

「ありがとうね、弟君」

すかさず、そのコトバをケモノは食べました。

弟くんには、コトバの雲が見えるメガネをしていたから、それがよくわかりました。

でも、ミナ子さんも女の子もケモノがバカに元気に何かを食べているフリをしているので、正直にいうと、面食らっていました。

「あなたが、あのケモノさんなのね。兄さんから、話を聞いたことがあるわ」

「はい、そうです。おっしゃるとおり、ケモノです」

ミナさんは少しためらいましたが、思い切って、聞きました。

「ねえ、ケモノさん、ケモノさん。イサオさん、弟君の叔父さんは、あなたの国で、どうしていた？」

「イサオさんとは、オオキイヒトのことだね？ オオキイヒトはケモノの国で、元気にやっているよ。元気すぎるのが、タマに傷だね」

それを聞くと、ミナさんは、しみじみとした気持ちになりました。

「そう。よかった……」

ふと、気づいたように、ミナさんは聞きました。

「どうして、ケモノさんはこの町にやってきたの？」

そういえば、それをケモノに聞くのを、弟くんは忘れていたと、思いました。うっかりものなんですね、弟くんは。

「ケモノの国でとっても偉い長老が、オオキイヒトとケモノを交換だと、いってましたね」

「そうなの。交換留学みたいなものなのかしら？」

「コウカンリュウガクの意味は、わかりませんが、なんとなく、そんな感じだね」

ケモノが変なことをいうので、ミナ子さんの隣にいた女の子は、笑い出しました。

「アハハハ。意味がわからないのに、そんな感じだなんて、変なの。意味がわからないなら、そんな感じだって、わからないじゃない」

ケモノは女の子の一言で、怒り出し、とてもキョーボーな一面を見せますが、弟くんがケモノを引きずるように、その場から連れ出して、ヒトモンチャクは終わります。

ケモノがいなくなると、女の子は「変なの」と、一言もらしました。

それから、何日かしたある日、弟くんは町でスシ屋さんの角ちゃんと会います。角ちゃんは、角田と書いて、ツノダと読む名字なのですが、みんな「カクちゃん」「カクちゃん」と呼びます。それは髪型が角刈りだからかもしれません。そんなことよりも、弟くんはお兄ちゃんが角ちゃんのお手伝いをしていたことを思い出します。

それは、汽車が運んでくるお魚さんを、お兄ちゃんがおスシ屋さんまで運ぶことでした。

お兄ちゃんが、いない今、角ちゃんがわざわざ、駅の荷降ろし場までとりにいっているので、ばったり町で角ちゃんと出会ったのでした。

弟くんは、角ちゃんのお手伝いをしたいと、思いました。

「そうか、それで、お兄ちゃんの代わりに務めたいわけか」

「はい。だって、お兄ちゃんにできたことが、弟のボクにも、できないわけない」

角ちゃんは腕を組んで、思案しました。

「よーし、わかった。お兄ちゃんとおんなじことを、弟君に頼んでやろう」

わあい、よかったね、弟くん。

そして、角ちゃんは、魚という漢字の右横に、「角」と書かれた、変な漢字が書いてある木の札を弟くんに渡しました。

「お兄ちゃんを、見ててわかると思うが、この札を荷降ろし場にいる明智に渡せば、魚を渡してくれるからな」

前に、お兄ちゃんと一緒に魚を運んだことがあるので、弟くんにも、わかります。

「じゃあ、ト口箱を持っていきな」

角ちゃんに頼まれた弟君とケモノは大急ぎで、駅の荷降ろし場に行きました。途中、町中の坂を駆け登って、駅へ行きます。

荷降ろし場に着くと、コーヒー豆をとりに来たおりつさんや、佐藤さんに会いました。二人とも、お兄ちゃんと同じことをしている弟くんに、笑いかけました。

汽車の荷物係りをしている明智さんは、シャツに作業ズボンを着て、軍手をして、帽子をかぶった人で、弟くんを見つけると、「はて？」という顔を見せましたが、弟くんが札を見せると「

なるほど、そうか」という顔を見せました。

角ちゃんのところから、持ってきた空のト口箱を明智さんに渡すと、お魚さんと氷がたっぷり詰まったト口箱を渡してくれました。このお魚さんは、角ちゃんの知り合いの魚屋さんが、港で選りすぐった、とれたてのお魚さんです。

「がんばれよ。弟くん」

と、明智さんにいわれて、弟くとケモノは大急ぎで角ちゃんのところに、戻ります。

両手にト口箱を掲げたケモノは、なんだか、ウキウキしています。

「ヨロコビいさんで

ハシャギすぎて

イキオイあまって

ケガをする〜♪」

どこで、おぼえたのか、そんなヘンテコな歌を歌いながら、ケモノは町中の下り坂にさしかかりました。

ああ、あぶない！

喜びいさんだケモノは、はしゃぎすぎて坂から転げ落ち、いきおいあまって壁にぶつかり、ケガをして、ト口箱の中身もぶちまけてしまい、せっかくのお魚さんを台無しにしまいました。

。

お魚さんをケモノに台無しにされた角ちゃんは、ケモノを叱りませんでした。それよりも、自分の頭にしていた鉢巻をケモノのケガをしたシッポに巻いてくれました。

それから、弟くんに、「鮪」という漢字を教えてくださいました。

毎日、弟くとケモノがお魚さんを運ぶと、角ちゃんは一日一字、魚辺のある漢字を教えてくださいます。

そうして、角ちゃんは魚が付く漢字を弟くんに教えきると、今度は「吉田のところに行け」と、いいます。

吉田さんとは、植木屋で、ザイモクギョウで、ゾウリングョウで、ゾウエンギョウを営んでいる、植ちゃんのことです。植ちゃんは、「植」と書かれた帽子をかぶっているのです、みんなに「植ちゃん」と呼ばれています。ホントは吉田なのに。

植ちゃんのところへ行くと、お兄ちゃんにさせていたように、山の斜面に若木を植樹することを、弟くんにさせます。

そして、「あそこにある、樫の木が邪魔で切って角材にしたいけど、人手が足りなくてね」と、もらします。

そして、植樹のお手伝いが終わると、「樫」の字を弟くんに、教えてくださいました。

毎日、弟くとケモノが植樹のお手伝いをした後に、植ちゃんは一日一字、木辺のある漢字を教えてくださいます。

そんな、ある日、叔父さんから手紙がとどきます。

「郵便デース」

外から、この声がしたので、弟くんは外に出て、ポストを開けてみると、イサオ叔父さんからの手紙が入っていました。

早速、手紙を読んでもみると、こんなことが書かれていました。

「弟君。元気にしているかい。

今日は、驚くようなことがあったから、君に教えてあげるね。

ケモノは、コトバの力を使うことができるんだ。

果物が生っているのに、高い木の上にあるから、取れないなと思っていると、ケモノがやってきて、『果物よ、落ちてこい！』と、いってくれというんだ。

ボクはいったいどういうことなんだろうと思いつきながら、『果物よ、落ちてこい！』と試してみた。そして、そのコトバをケモノが食べると、ケモノは『果物よ、落ちてこい！』と、まるで呪文を唱えるようにいったんだ。すると、高い木の上に住んでいた果物が、落ちてきたんだ。

ケモノにいったい、なにをしたのか聞くと、コトバの力を使ったのだという。

ケモノはコトバの力という、すごい力を持っているんだ」

手紙を読んでも、横にいるケモノのどこに、そのコトバの力があるのか、弟くんには、わかりませんでした。

そこへお母さんが戸棚の上にある箱を取ろうとします。でも、背がちょっと低くて、手がとどきません。仕方なくお父さんが帰ってくるまで、待つことにしました。

それを見ていた弟くんは、「コトバの力」を試してみることを、思いつきました。

「戸棚の上のモノよ、落ちてこい！」

というコトバをケモノに食べさせます。すると、ケモノは「戸棚の上の箱よ、落ちてこい！」というコトバをしゃべると同時に、淡く輝く雲を口から吐き出します。その雲は戸棚の上の箱のところまで、飛んで行き、箱に触れて包み込むと、消えてしまいますが、箱はガタガタと動き出して戸棚からずり落ち、床に落ちてしまう、すんでのところで、弟くんは箱をキャッチします。

ケモノはコトバの力を使えるのです。（実は水晶を山へ採りに行ったとき、使っています）

弟くんは、あの櫛の木を植ちゃんのところまで、コトバの力で歩かせられないか、考えました。

ケモノは「それは面白そうだね」と、のってくれたので、急いで櫛の木のところに行きました。

弟くんは、櫛の木を見上げました。

とても大きくて、立派な樫です。この大きな木が、コトバの力で動いてくれるのでしょうか？
弟くんは、力を込めていました。

「樫の木よ、歩き出せ！」

そのコトバの雲をケモノはつかみとり、いきおいよく食べつくしました。

「樫の木よ、歩き出せ！」

ケモノがしゃべると、口からあの淡く輝く雲を吐き出しました。弟くんはそれを見て、さっき見たばかりなのに、懐かしいと思いました。いいえ、さっき見たときも、懐かしいと思ったことを、思い出しました。

その雲が樫の木を包み込み、消えてしまうと、地面が揺れだしました。それでケモノは「わわわ」と慌てました。

樫の木の根元から、足の形になった根っこが地面から出てきました。とても大きい根っこの足が二本、樫の木の根元から生えていました。そして、その両足で立って歩いています。

「やったー。樫の木が歩いた」

ズシーン、ズシーンと、大地を響かせながら、樫の木は根っこの足で歩きます。

植ちゃんのところまで、樫の木を歩かせたいのに、ショウガイはたくさんあるのですね。
岩や川が樫の木の行く先を塞ぐので、その度に弟くんは、ケモノにコトバの力を使わせて、迂回させたりします。

コトバの力を使うたびに、ケモノは元気をなくしていきます。

ケモノは、目を回していそうな足取りで、疲れていました。

植ちゃんのところまで、樫の木を歩かせたところで、ケモノはとうとう、倒れてしまいました。

植ちゃんは、樫の木の礼とばかりに、弟くんのうちまで、ケモノをおぶってくれました。

翌日、「郵便デース」と、叔父さんから、手紙がきました。

「やあ、元気にしているかい。弟君。

ケモノにコトバの力を使わせているかい？

でも、ケモノにコトバの力をたくさん使わせるのは、よくないぞ。

ケモノにコトバの力を使わせすぎると、いけないことになるからね。へとへとに疲れて、動けなくなってしまふんだ」

それはもう、知っています。

弟くんは、どうして、叔父さんはいつも、ひとつ遅れて大切なことをしらせるのだろうか、思いました。はやくに、知らせてくれれば、今日のように、ケモノが寝込んでしまうこともなかったと、思いました。

手紙には、続きがありました。

「コトバの国のケモノたちは、約束をして、生まれてくると、みんないうんだ。いったい、その約束はなんなのか、たずねてみても、彼らは教えてくれない。

その代わりに彼らは、オジさんも約束をして生まれてきたと、いうだけなんだ。

もしかしたらね。

ケモノだけじゃなく、みんな、みんな、その約束をして生まれてくるのかも、しれないなんて、思うんだ」

こちらでは、ケモノが大変なことになっているのに、それを知らないとはいえ、なんてのんきなことを書く人だろうと、弟くんは思いました。

その晩、弟くんはお父さんにたしなめられました。

「ケモノのコトバの力は、本当に大事な時にしか、使っちゃいけない」

「どうしても？」

「どうしてもだ。ケモノがあんなふうになっているのは、イサオの話によると、コトバの力を使い続けると、なるというじゃないか」

ケモノはみんなが夕食の団欒をしているときにも、ソファで寝そべっています。いつもなら、おいしいコトバがないか、シッポをふってテーブルの横にかじりつくのに。

お母さんは、そんなケモノに、「元気ではしゃいで、騒ぐ、ケモノさんが、わたしはとっても大好きよ」というコトバを食べさせました。

弟くんは、ケモノをうらやましがりました。

お母さんに、とっても優しく、ほかほかした甘いコトバをかけてもらえるケモノが、憎らしくてしかたありません。

つい、ケモノにトゲトゲして苦いコトバを投げかけて、ケモノを涙で顔がぐちゃぐちゃになるくらいに、泣かしてしまいました。

そんなつもりはないのに。

弟くんは、悲しくなって、

「ゴメンネ、ケモノ」

と、いいました。自分の勝手に、コトバの力を使わせたことや、苦いコトバをいったことを深く後悔しました。

ケモノは泣くのを、なんとか止めて、弟くんに笑いかけました。ケモノは憎いやつです。二三日もすると、ケモノはまた、いつもの愉快で元気な、ちょっとランボウなやつに戻りました。

弟くんはケモノと連れ立って町へ行こうとすると、女の人に声をかけられます。

メガネをかけて和服を着た人でした。

その人は、弟くんに道を聞き、それは弟くんの家から少し離れていましたが、お隣の家でした。

家に帰ると、お隣に矢立さんという人が、引っ越してきて、お母さんに挨拶に来たとわかります。

そういえば、お隣は空き家でした。

翌日、弟くんとケモノは、お母さんにいわれたので、お隣へお引越しの手伝いに行きました。

矢立さんは和服姿でほっかぶりをして、たすきをかけて、家のそうじをしていました。

弟くんは、矢立さんに挨拶して、手伝いに来たといいました。そして、自分のことは「弟君」と呼べばいいと、いいました。

さっそく、小さなお手伝いさんたちに、矢立さんは、部屋の中の家具を、一度外に出してほしいと、頼みました。

弟君とケモノにかかれば、たいていのものは運べます。

でも、机は重くて運べません。そこで、ケモノにコトバの力を使わせたらいいと、弟君は思いました。

少しくらい、コトバの力を使ってもいいじゃないか。

「机よ、外に出ろ！」

ケモノが弟くんのコトバを食べて、コトバの力を使って、机に語りかけると、すると机はそろそろと歩き出しました。

いけない。

机は外へ出るために、壁にぶつかりました。机のどこに、そんな力があつたのでしょうか。机は壁をぶち抜いて、外へ出てしまいました。

外でそうじをしていた矢立さんは、机がひょっこり歩いてきたのにびっくりして、慌てて家の方に戻りました。

すると、壁に机を横から見た形通り、壁に穴があいています。その穴から、家の中で弟くんとケモノが顔を見合わせているのが、見えます。一人と一匹は、なんだか、おかしくって、笑い始

めました。

矢立さんに「事の経緯」を話すと、罰の悪い弟くんは、大工の新さんと呼ばれに行きました。壁の穴を塞いでもらうためです。進さんは男ぶりがいいので、そういうことにかんしては、イヤでも引き受けます。

壁は、あの檜の木で作った板で穴が塞がれました。

それだけでは、ありません。

新さんは矢立さんに会うと、雨漏りはしていないか、隙間風はないか、矢立さんにいろいろと聞き始めました。どうしたのかな。

それで、仕事を手伝わせるためにイナゴさんと呼んできてくれと、弟くんを使い走りする始末です。

イナゴさんは、渋々やってきましたが、矢立さんのところに来ると、急にやる気を出して、セッキョクテキに手伝い始めました。

矢立さんは、二人の昔の知り合いなのです。

家が補修し終わっても、なにから、なにまで、二人はしようとするのを、矢立さんは惜しみながら、断りました。そして、二人は名残惜しそうに帰っていきました。

今度は、矢立さんが家のことを手伝ってくれたお礼として、弟くんとケモノに習字を教えてくださいました。壁に穴をあけられたというのに、いい人なんですね、矢立さんは。

弟くんとケモノは習字でみつつの勝負をしました。

それからというもの、一人と一匹は、矢立さんのところで、習字を覚えてくれるようになりました。

それだけでは、ありません。

なんだか、矢立さんが町にやってきてから、角ちゃんも植ちゃんも大工の新さんもイナゴさんも、浮かれています。

どうしてだろうね。ウフフフ。

そんな、ある日、見知らぬ人が、道端で、あっちにいたり、こっちにいたりしています。いつも、迷っている人に声をかけるように、「道に迷っているんですか？」と、弟くんは聞きます。

その人は男の人のようで、女の人のようにもありません。

その人は天使のような声で、弟くん、「クワガタさんのところに行きたいんだ」と、告げました。

クワガタさんとは、弟くんのおばあちゃんちのことです。

弟くんは、いつも迷っている人になっているように、その人におばあちゃんちまでの道順を教えました。

その人は、お礼を弟くんにいうと、行き先を知っているように、歩き出しました。

その人は、おばあちゃんちに来ると、おばあちゃんに顔を見せました。

「あらあら、もう、そんな季節になっていたの……」

「十日ぐらいしたら、取りに来ます」

そういって、その人は風のように、去っていきました。

さて、おばあちゃんは、困りました。

リウマチで、手が思うように動かないのです。

そのとき、ケモノがやってきました。

息子のお嫁さんが、たまに料理を分けて、ケモノに持たせるのです。これは、前はお兄ちゃんの仕事でした。

「はい、オトウトクンのおばあちゃん。ジャガ芋とにんじんとにわたりの煮物です」

覚束ない手で、その煮物が入ったカゴを受け取ると、ケモノが器用にカゴの取っ手を握っていることに気づきました。

「ケモノさんは字が書ける？」

「はい。矢立センセイから習ってる」

「そういえば、ノゾムちゃんが、帰ってきているんですってねえ」

おじいさんが小さかった矢立さんに、漢文を教えていた頃を思い出しました。新さんもイナゴさんもイサオさんも、角ちゃんも植ちゃんも、小さい頃、おじいちゃんにみんなと一緒に漢文を教わりました。

おばあちゃんは、おじいちゃんが生きていた頃に作っていた漢詩を読み上げました。

ケモノはそのコトバを食べたくなりました。

「ケモノさん、わたしのいうことを聞いてくれる？」

ケモノは目を輝かせて、うなずきました。

ケモノは紙に筆で「かぼちゃ」と書くと、なんだか、不満になりました。字が大きすぎて、紙からはみ出しています。

「もっと、小さい字を書けるようになりたい」

「それじゃあ、小さい筆をもってきましょうね」

「センセイは、ナカナカ話がわかりますね」

ケモノがそんなナマイキをいっても、矢立先生は怒りもせず、笑顔のまま、筆入れの中から細い筆を持ってきました。

弟くんはケモノが、なんだか習字にこっていると思いました。

そんなものですから、お父さんに昨日、

「熱心に矢立さんのところで、習字を習ってるそうじゃないか？ ケモノは何か書きたいことでもあるのかい？」

と、聞かれたりしました。でも、ケモノはナマイキです。

「ンフッフ。ヒミツ」

というだけです。

「オウトクン、三本勝負をしよう」

「ええ、またかい？」

「センセイ、オダイを出して」

「そうねえ。まずは、子っていう字をたくさん書いてみてごらんなさい」

そして、こうして習字の勝負を何度もするのです。最近のケモノは、ちょっとヘンです。

そんな、ある日、弟くんは町に出ます。ところが、いつも自分についてくるケモノが、今日は見当たりません。町のどこを探しても、いません。

用事もないのに、おかしいなあ、と思い、いろいろな場所を探してみますがいません。

ここには、来ていないだろうと、思ったおばあちゃんチに行くと、家はカギを閉められています。

こんなことは、今までにないので、ふしぎに思った弟くんは裏の方へ回ってみます。すると、おばあちゃんとケモノの話し声がしました。窓から、話し声がもれているのです。

外から、バレないように話を聞くと、おばあちゃんは、ケモノに聞き書きをさせて手紙を書いてもらっているようです。弟くんは、それで、おばあちゃんがリウマチで字が書けないことを思い出しました。

おじいちゃんのスズリとスミで書いているらしい、その手紙は、天国のおじいちゃんの手紙でした。

おじいちゃんは天国で平穏に暮らしていますか。

亡くなった弟のお兄ちゃんは天国では元気ですか。

弟くんは悲しそうだったけれど、ケモノがやってきたおかげで、元気を分けてもらっています。

「天国にいる、オジイチャンさんにどうやって、手紙を渡すんですか？」

おばあちゃんは笑いました。

「うちのポストに手紙を入れておけば、いいだけなの。そうすれば、次の日には無くなっているわ」

「そういうものなんですか？」

「そういうものなのね」

弟くんはこのことを聞くと、天国にいるはずのお兄ちゃんにも、手紙を出したいと思いました。

急いで家に帰り、手紙を書きました。

今は、家にケモノと一緒にいて、元気にやっていると書いて、おばあちゃんちのポストに入れておきました。

その頃、ケモノはおばあちゃんにたくさんの漢詩を食べさせてもらっていました。夢中だったので、弟くんがポストにそんなことをしていたなんて、ちっとも気づきません。

翌日、おばあちゃんちのポストの中身がなくなっているか、調べたいのに、いつものようにケモノがついてきます。

そこで、イッケイをアンじて、ケモノに道順を教えて、自分は別の道を通ってそこまで行き、どちらか早く着くか、競争だと持ちかけます。

勝負事を持ちかけられて、ことわるケモノではありません。

競争をはじめると、弟くんは道から外れて、おばあちゃんちに行きます。そして、ポストを見ると、おばあちゃんの手紙も自分の手紙も、なくなっていました。

一方、その頃ケモノは、弟くんの道順通りに行き、道が三つに分かれたところに辿り着きます。勝負はケモノの勝ちでした。

そこへ、矢立さんがやってきます。そして、矢立さんがいつも、挨拶をしても、おじぎをするだけの男の人も、やってきます。矢立さんは、自分が声を出して、いつも、その人に挨拶するのに、どうしてその人は、声を出して挨拶をしてくれないのか？ と、不満に思っている人です。

矢立さんがいつもするように、声に出して「こんにちは」といっても、いつも通り男の人はおじぎします。

そして、男の人は矢立さんとすれ違いざま、口を動かして、なにかをしゃべりました。それは、男の人がいつも、していることでした。

ですが、そこには、ケモノがいます。

そのコトバの雲は、とつても、甘そうでふわふわしていて、そのへんの綿菓子が束になってかかっても、その素晴らしさには敵わないように見えました。

コトバの雲をつかむと、ケモノは丸呑みして、おいしさに打ち震えて、コトバの意味をしゃべりだしました。

「僕は君が好きだ」

男の人は驚いて、ケモノを捕まえようとしています。

「だけど君には僕のコトバは通じない」

ケモノは男の人に追いかけられながら、しゃべりました。

「なぜなら、僕はコトバをしゃべることも、声を聞くこともできないからだ」

ハッとする矢立さん。

「だから、僕は声にならないコトバで、君に想いを伝えるんだ」

ケモノは男の人に捕まえられ、はがいじめにされ、口元を押しえつけられそうになりましたけれど、ケモノが男の人の手に噛み付いて、慌てた男の人は、ケモノを放してしまいました。

「この、ランボウもの！」

と、捨てゼリフを言い残して、ケモノはどこかへ逃げていきました。

「あなた、しゃべれなかったの？」

と、言って矢立さんは口元に手をやった。「いけない。聾の人に声をかけても聞こえないわ」と、心の中で思いました。矢立さんは女流書道家ですから、「聾」という難しい漢字も知っているのですね、

男の人は、矢立さんに声をかけられても、ケモノに噛まれた手を、ケガをしてないか、どうか、見ているだけでした。

矢立さんは、自分が矢立という、どこにでも筆を持っていける物を持っていることを思い出して、懐の紙を取り出して、矢立から筆を取りました。

「失礼ですが、お尋ねしますが、あなたはしゃべれないのですか？」

こんなコトバを紙に書くと、男の人に差し出して見せました。

男の人は、紙に書かれた文字を読むと、うなずきました。

矢立さんは、少し困りました。

「ごめんなさい。わたし、それを知らなくて、あなたに声を出して、挨拶してしまっていたみたい」

こんなコトバを書いて謝りました。

男の人は、矢立さんが持っている筆を貸してもらいたいように、手の平を出しました。

矢立さんは恐れずに、筆を貸しました、

男の人は、自分の手の平に筆で、こんな、コトバを書きました。

「別に気にしません。だって、あなたに挨拶されたんだから」

それから、二人は紙と筆で、いろいろなことを話し合いました。

「わたし、矢立ノゾム」「僕は、渡トオル」「わたしはこれでも書道家なの」「僕は、取金教授のところで、世界中のコトバを日本語に翻訳しているんだ」「すごいよね、コトバを聞くことができないのに、そんなことができるなんて」「声が聞けないから、できるのかもしれない」「ねえ、声が聞こえないなら、どうして、ケモノさんがコトバをしゃべるのを聞こえたように、ケモノさんを追いかけてまわしたの」「聞こえたんですよ」「聞こえた？」「ええ、ケモノのコトバが聞こえたんです。だから、ケモノって、すごいんですよ」

二人は紙がなくなるまで、コトバを書いて、話し合いました。紙がなくなると、渡さんは、矢立さんが着ている和服の袖を引っぱって、矢立さんをどこかへ誘いました。

矢立さんは、それを断りませんでした。

こうして、二人は仲良くなりました。

なんだか、矢立さんが渡さんと一緒にいるようになってから、角ちゃんも植ちゃんも大工の新さんもイナゴさんも、落ち込んでいます。

どうしてだろうね。ウフフフ。

「郵便デース」と、叔父さんから、手紙がきました。

「弟くん、元気にしているかい。ケモノは元気がありすぎてアバレてないかい。

アバレたり、泣いたりするのは、ケモノにとって、おしっこやウンチをするようなものだから、許してやっておくれ。

難しいことをいうかもしれないが、ケモノにとって、カンジョウは、コトバのハイセツブツなんだ」

なんという、はた迷惑な言い分でしょう。

弟くんはおしっこやウンチをところかまわずする生き物を、送りつける叔父さんが、たまらなく、許せない気持ちになりました。

手紙にはまだ続きがありました。

「そういえば、ケモノたちは、コトバの力を使うためのコトバをいくつも、ためておけるらしいんだ。いくつも、コトバを食べて、必要なときに、いくつもコトバの力を使う。

そして、自分のコトバを食べて、ケモノがコトバの力を使うときもある。

でも、それは自分の子供が病気になったときにしか、することはない。

オジさんの考えでは、これは皇帝ペンギンのペンギンミルクのようなものだと思う」

手紙を読んで、弟くんは疑問に思いました。

「皇帝ペンギン、それから、ペンギンミルクって、なんだろう？」

家には、お母さんがいるので、聞いてみることにしました。

「それは、取金さんなら、ご存知ね」

「ええー」

お母さんの一言を聞くと、弟くんは嫌がりました。

取金さんこと、取金教授は、この町の大先生です。

でも、弟くんは取金教授のところに行くのは、不満です。

でも、仕方なく、取金教授の家に行き、家に上がりました。

渡さんは、弟くんの口元をよく見るために、そこにギョロリと目を向けました。

いつもどおり、弟くんの唇は「取金教授はいますか？」と動いたのを、確かめると、渡さんはアゴを家の奥に向け、すぐに本に目を戻しました。

弟くんは無愛想な渡さんが苦手で、すぐにその場を通り抜けたくて、足早に渡さんの横を通り

抜けました。その弟くんについてきた、ケモノが渡さんを見ると、あのはがいじめにされたことを思い出し、

「ふん。このランボウもの」

と、渡さんにいいました。

それは、渡さんの心の中に響いて、ハッとするように、渡さんは顔を上げて、ケモノの方を見させる、まさしく、コトバの力がありません。

機嫌悪く弟くんの後を追いかけるケモノの後姿を眺めて、渡さんは「たいしたやつだ」と、ケモノに心のコトバで語り掛けました。

それに、気づいたように、ケモノは後を振り返り、渡さんを見ました。渡さんは不適に微笑んでいるので、ケモノは面白くなさそうに、「フン」といって、弟くんを追いかけてきました。

見知らぬ人が、道端で、あっちにいたり、こっちにいたりしています。

いつも、迷っている人に声をかけるように、「道に迷っているんですか？」と、弟くんは聞きます。その男の人は、「いや、道には、迷っていないんだ」といいます。でも、なにかに迷っているようです。

その男の人は、意を決したように、歩き出すと喫茶店メロディに入ります。

調度、短歌の父ちゃんが「おリツさんのオレンジジュースを飲むと、物事を科学的に考えられるようになる」と、冗談をいっているところに、その男の人は外から入ってきます。

その人を見るとおリツさんは驚きます。

「母さん、帰ってきちゃった」

「トシヒコ…… トシヒコ！」

短歌の父ちゃんを突き飛ばして、トシヒコさんのところにおリツさんは、駆け寄ります。

「お前、いったい、どうしたんだい」

トシヒコさんは、ゆっくりいいました。

「もう、歌を歌うのは、止めたんだ」

おリツさんの息子のトシヒコさんは、歌手になりたくて、ずいぶん昔に町から離れて、遠い場所で、歌を歌っていました。弟くんはそれを知らなかったのです。だから、弟くんにとって、トシヒコさんは見知らぬ人でした。

「歌を止めるって、それでどうするんだい？」

「他のことをするだけだよ」

おリツさんのメロディに帰ってきたトシヒコさんは、町で暮らしていくために、働きはじめます。

トシヒコさんは角ちゃんの手伝いをしたり、植ちゃんの手伝いをしたり、佐藤さんの手伝いをしたり、大工の新さんの手伝いをしたりします。

でも、失敗ばかりです。

角ちゃんの大事な刺身包丁を磨ぎすぎて折ったり、植ちゃんの大事な松を枯らしたり、佐藤さんの大切な思い出がつまった宝石を二つに割ったり、あげくのはてに、できたばかりの家を一軒、トウカイさせたりしました。

その度に、ケモノがやってきて、コトバの力で、折れた包丁をくっつけたり、枯れ松の息を吹き返させたり、宝石を元通りひとつにしたり、トウカイした家は、さすがに建て直さなくてはいけず、弟くんもケモノも、家を建てるのを手伝いました。

トシヒコさんは、すっかりそれで、めげてしまいました。

家の建て直しが終わったあと、気持ちさがボロボロになって、メロディに帰ってきます。おリツさんは、そんな息子さんを温かく迎えます。

おりつさんは、イスに座って落ち込んでため息をもらすトシヒコさんに、一杯の梅ジュースを渡します。

「わかったかい。お前には、歌を歌うことしか出来ないんだよ」

トシヒコさんは、受け取ったジュースを一気に飲み干します。

「夢をあきらめるんじゃないよ」

トシヒコさんは、ハッとしました。

おりつさんは、微笑みます。

弟くんは、おりつさんのコトバを食べようとするケモノを押さえつけます。いい場面を台無しにしそうです。

「母さん、オレは……」

「いいから、歌を歌い続けてごらん。それに、この子たちに、迷惑をかけたんだろ。だから、お前ができることをしてやったらどうだい」

シッポを振って、おりつさんのコトバを食べようとするケモノと、それを押さえつけている弟くんを見て、トシヒコさんは微笑みました。

「わかったよ。母さん」

そして、メロディのお店の中に、ずっと飾ってあって、使われていない、でもホコリひとつなくそうじされたピアノの前に、トシヒコさんは立ちました。

そして、町のみんなから聞いたケモノの話の思い出すと、イスに座って、ピアノを弾き始めました。

テテテンテン テンテンテン

テテテンテテテン

ドゥン！

デンデンデン デンデンデン

デーデーデー デデーデー

まるで、ご主人が来るのをずっと待っていた犬が、ついにご主人に会えて、喜んで飛びはねて鳴くように、ピアノは音を鳴らしました。そして、トシヒコさんは歌いだしました。

「コトバの国から、やってきた

ケモノがマチに、やってきた

でも、君は、オーボーで

ランボウで、キョーボー♪

みんなのいうことは

きぎやあしない

でも、コトバの力

なんてなくたって

元気をみんなに分けるのさ♪

すると、みんなは

きみのことを、なんだか

許してしまうのさ♪

コトバを味わう、君はケモノ

コトバを食べる、ケモノだから

コトバを愛する、君はケモノ

コトバを食べる、ケモノだから」

トシヒコさんは、少し涙声になりました。

「僕も、君と、同じケモノ

コトバを食べる、ケモノなのさ」

ピアノも弾くのも、歌を歌うのも止めてトシヒコさんは、おリツさんと弟くんとケモノを見て、笑いかけると、またピアノを弾きました。

「だから、いつまでも、一緒だよ」

歌を終えると、トシヒコさんは早速、支度をして、おリツさんと弟くんとケモノに別れをいうと、駅へ行きました。

また、遠くの町へ、行くのです。

「フシギ。おリツさん、コトバの力を使わないのに、トシヒコに言うことを聞かせた」

ケモノがそういうと、おリツさんは笑ってこう、答えた。

「大人はね、コトバの力なんて、必要ないのよ」

弟くんは、大人さんになるということが、少しだけ、わかった気がしました。

「郵便デース」

弟くんは叔父さんの手紙が来たと思って、手紙を取りますが、その手紙は弟くんの家への手紙ではありません。

それはこの町の病院への手紙でした。

弟くんは誤って配られたそれを、病院までケモノと一緒にとどけに行きました。

その手紙の受取人は、仁科アケミという人です。

病院に着き、看護婦のミナ子さんに会うと、アケミという人に手紙を渡してあげると、弟くんはいわれました。

ついでだから、アケミという人にも、会ってみることにしました。

アケミという人は、病院の「ニューインカンジャ」で、ケモノのことをおかしいと、笑った女の子でした。

弟くんは、いつもの通り、「僕をオトウトクン」と呼べばいいからと、アケミちゃんにいました。

でも、アケミちゃんは、そわそわするだけです。正直、アケミちゃんは、キョーポーなケモノを遠ざけたいと、思っていました。ケモノにうさぎのぬいぐるみを取り上げられて、踏んづけられて、うさぎの腕をもがれた思い出があるのですから、仕方ありません。

だから、病室から出て行ったミナ子さんと呼んできてと、ケモノにいました。

ケモノはちょっとタンジュンなので、快く引き受けました。

部屋には、弟くんとアケミちゃんが二人きりです。

「ねえ、どうして、あなた、オトウトクンって、名前なの？」

「ちがうよ、ボクはオトウトクンって、名前じゃないよ。ボクにはお兄ちゃんがいて、お兄ちゃんの弟だから、みんな『弟君』って、呼んでいるだけだよ」

「その、あなたのお兄さんは、どうしているの？ ケモノと遊んだりしているの？」

弟くんは、今まで、誰にも聞かれなかったことを聞かれて、少し心がざわめきました。

「ボクのお兄ちゃんは、とても治るのが難しい病気で、死んじゃったんだ」

アケミちゃんは、目を見開いて、そのコトバを聞きました。驚いたのでしょうか。いえ、弟くんにはメガネを通して、自分のコトバの雲を真正面から受け止めたアケミちゃんを見えました。弟くんが大人さんだったら、ロウバイということを一瞬、アケミちゃんはしたとわかったでしょう。

でも、気を取り直して、アケミちゃんは、すぐに落ち着きました。アケミちゃんは強い子です。落ち着きついでに、話題も変えます。

「そう、それなら、あなたの本当の名前を教えてください？」

「ボクの本当の名前？」

「そう、お兄さんがいないなら、あなたはいつまでも、オトウトクンって、呼ばれるわけには

、いかないじゃない」

「そうかなあ」

「もう、名前ぐらい、おしらずに教えてくれたって、いいじゃない」

仕方がないと、弟くんは思いました。それで、アケミちゃんに自分の名前を教えました。でも、自分の名前を教えるだけなのに、なんだか、とても秘密めいた、怪しいような、いけないことをしているような気分なので、弟くんはドキドキしました。

ケモノはミナ子さんを探して、病院の中を駆けずり回りました。

「そうになったら、この町に住む、子供がたった一人きりに、なってしまう。そんなことには、させはしない。けれど……」

声がした方へ行くと、お医者さんがミナ子さんと話していました。

「日本中の子供たちが、一斉に同じ病気にかかって、死んでしまうんだ。アケミちゃんも……」

「先生、そんなことは思わないで下さい。アケミちゃんの、とても治るのが難しい病気は、きっと治ります」

「ミナ子さん。アケミちゃんが呼んでいるよ。来てください」

ミナ子さんは驚いて、ケモノに尋ねました。

「今の話を聞いていたの？」

「うん。アケミちゃんの、とても治るのが難しい病気は、きっと治るでしょ」

ケモノは真っ黒な目をこちらに向けて、いいました。そんな目で見られたら、吸い込まれそうです。ミナ子さんは少し、安心しました。不安が目が吸い込んだのかもしれない。

「そうよ。アケミちゃんのとても治るのが難しい病気は、きっと治るわ」

そして、病室にいるアケミちゃんのところへ、ケモノと手をつないで行きました。

ケモノとミナ子さんが病室にやってくると、弟くんとケモノは家に帰りました。

一人きりになったアケミちゃんは弟くんが持ってきてくれた手紙を読み始めました。

でもその手紙は、いつも自分に手紙をくれる、同じ病気に苦しむ子からの、手紙ではありませんでした。

その子のお母さんからの手紙です。

それも、その子が病気で亡くなったことを伝える手紙でした。

今まで、あの子に手紙を書いて励ましてくれて、ありがとうございました。

アケミちゃんは、わんわんと泣きました。

次の日、何の用もないけど、弟くんはケモノを連れて、アケミちゃんのところにやってきました。コドモだから、何の用もなくとも、来るのです。

アケミちゃんは、うさぎの目のように、目を赤くしていました。

どうして、目が赤いのか弟くんが聞いても、答えてくれません。

それよりもアケミちゃんはまた、ミナ子さんと呼んでくるように、ケモノに頼みました。

病室で二人きりになると、アケミちゃんは弟くんに、お願いをしました。

「わたしがいつも、ベッドで寝ていて、枕に頭を乗せて、ポニーテールにしたくも、できなか

ったこととか、真っ白いワンピースを着て、外をかけ回りたいかったとか、洗い立てのシーツがかけられたベッドで眠るのが好きだったとか、憶えていてほしいの」

「う、うん」

弟くんには、アケミちゃんがどうして、そんなことをいうのか、わかりませんでした。

隣に大人さんがいれば、多分、こう思ったでしょう。アケミちゃんは死ぬのが怖いから、自分が死んでも弟くんが自分のことを憶えていてくれれば、なんだか気が楽になるから、こんなことをいうのかなと。

そんなことは知らないコドモの弟くんは、アケミちゃんがポニーテールにしたいくてもできないことや真っ白いワンピースを着たいことや洗い立てのシーツが好きなことをずっと憶えていようと思いました。

すでに、洗い立てのシーツがかけられたベッドで眠るのが好きというのを、洗い立てのシーツが好きと憶え間違っていることにも気づかずに。

そして、また、ケモノがミナ子さんと呼んでくると、弟くんとケモノは家に帰ることになりました。

弟くんは、アケミちゃんが少しヘンだと思いました。それをケモノに、いうと、ケモノは「それは、アケミちゃんがとても治るのが難しい病気だからじゃないかな」と、いいます。目が赤くなったのは、病気の性だと、思い違いをケモノはしているのです。

そんなことより、ケモノは口をすべらせています。弟くんは、アケミちゃんが、とても治るのが難しい病気だなんて、知らされていません。

病院にとって返し、アケミちゃんには、そのことをとても聞けず、仕方なくミナ子さんに恐る恐る聞きました。

「アケミちゃんは、お兄ちゃんと同じ、とても治るのが難しい病気なんですか？」

弟くんが質問すると、ミナ子さんはやっぱりバレたかと、いう顔をしました。

「ミナ子さん、そうだよ。だから、目が赤くはれちゃったんだよね」

横にそのことを知る、こんなケモノがいては、いつかは知られてしまうと、思っていました。

ミナ子さんは、気丈に振舞うことを忘れずに、ゆっくりと弟くんの質問に答えました。

「そうよ。アケミちゃんは、あなたのお兄ちゃんと同じ病気よ」

弟くんは、あのコトバの雲が、自分に真正面から向かってきて、すごい力で自分をなぎ倒そうとしているのに、精一杯耐えました。これと同じコトバを、同じようにアケミちゃんは受け止めたのか、と思いました。

「でも、アケミちゃんのとても治るのが難しい病気はきっと治るわ」

「アケミちゃんは、それを知っているんですか」

「そうよ。アケミちゃんは強い子だから、恐れずにいるのよ」

そんなのは、ウソだと弟くんは思いました。

アケミちゃんが、どうしてヘンだったのか、これでわかりました。

自分が、「お兄ちゃんがとても治るのが難しい病気で死んだこと」を知らせたせいで、怖くなって、目が赤くなるほど泣いたのだと、思いました。

弟くんは自分が腹立たしくなって、病院を飛び出しました。ケモノも後からついてきます。

それで、アケミちゃんがどうして、自分のことを弟くんに憶えてほしいと願ったのか、やっとわかりました。

アケミちゃんはもしかしたら自分が死んでしまうことに、怖くなってしまって、ですから、自分のことを憶えてほしいと、いったのと思いました。

もし、自分が死んだとしても、自分のことを憶えていてくれる人がいれば、安心ですから。

弟くんは、少しだけ、大人さんになりました。

そして、アケミちゃんのことを、心配になりました。

ミナ子さんは、お兄ちゃんにも、あのコトバをいいました。でも、お兄ちゃんは助かりませんでした。

アケミちゃんも、そうになってしまうのか、本当に心配になりました。

そう思うと弟くんは、晩御飯を残してしまい、夜遅くなっても、眠れません。

アケミちゃんのとて治るのが難しい病気が早く治ってほしいとばかり、思いました。

その晩、アケミちゃんところに、誰かがやってきました。

その人は男の人のように、女の人のようにもありません。

「迎えにやってきましたよ」

そうすると、その人はアケミちゃんの頭をなでてあげました。

でも、アケミちゃんはイヤイヤするように、首を振りました。その人は、思いとどまりました。

「そうか、君は強い子だね。一日だけ、待ってあげるね」

そうすると、その人はどこかへ、去っていきました。

朝寝坊をした弟くんは、誰にも起こされず、ずいぶん遅くまで眠ってしまいました。

起きだしてみると、机の上に二つ手紙が置かれています。誰かが、手紙を入れるところから、持ってきたのでしょうか。

一つ目の手紙は、叔父さんからの手紙でした。

「弟君、元気になっているかな？ ケモノと仲良くしてるかな？ オジさんは今日、そちらに帰ることになってね。もしかしたら、この手紙が着く前に、もう、帰ってきているかもしれない。そちらに帰ったら、ゆっくり、コトバの国の話をしようと思う。ケモノにも伝えてくれ。」

いつも、手紙を送りつけてばかりいて、ゴメンネ。弟君が悲しくにならないように、手紙を書いてやってくれて、いわれてたんだ。だから、ちょっと、ゴーマンなことを書いたかもしれない。腹を立てることを書いたかもしれない。でも、悲しいよりは、腹を立てる方がいいんだ。だから、許してくれるね。このコトは兄さんにナイショだからね、弟君」

弟くんは、少し悲しくなりました。イサオさんは自分を気遣っていたなんて、ちっとも知りませんでした。

二つ目の手紙は、天国のお兄ちゃんからでした。

弟くんは、驚きながら、その手紙を読みました。

「はじめて、おまえに手紙を書くと思う。

だって、天国におまえの手紙がとどいたんだから、ビックリするだろ。

手紙がきたことを、書かなくちゃならないから、この手紙を書いたんだ。

手紙は読んだぞ。

手紙を読まなくても、だいたいのことは知ってる。

天国では、おじいちゃんとずっと、おまえのことを見ていたんだ。

一緒に遊ぶ約束を守れなかったこと、ごめんな。できれば、ひろくておおきい場所で、おまえと遊びたかった。

それから、ケモノに伝えてくれ。

元気を弟のお前に分けてくれて、アリガトウト。

おまえは今、アケミちゃんのことを心配しているようだが、だいじょうぶさ。

アケミちゃんのとてもしるのが難しい病気はきっと治る」

その手紙を読むと、弟くんはお兄ちゃんに無理な約束をさせて、心残りを残してしまったことを悔やみました。

そして、心配せずにいようと思いました。

アケミちゃんのとてもしるのが難しい病気はきっと治ると、思えるからです。

ふと、弟くんはそういえば、ケモノがいないことに気づきました。もう一度、手紙を読み直しました。

弟くんは思いをめぐらすと、ケモノはこの手紙を読んだに違いないと考えました。ともかく、ケモノを探さなくてはと、急いで着替えて、外に出ました。

でも、すぐに引き返して、角ちゃんのハチマキを持ち出すと、外へ出て行きました。

それから、しばらくして、日焼けした男の人が、誰もいない弟くんの家にやってきました。

弟くんは、横山さんの家のダイジロウのところへ行って、思い切って鎖を外し、ハチマキについたケモノの臭いを嗅がせると、ケモノの臭いを追いかけて走るダイジロウを追います。

まず、ケモノは矢立さんのところに行き、「キレイな字で、このコトバを紙に書いて」といって、そのコトバを紙に書いてあげると、すぐにどこかへ行ってしまったといいます。

ダイジロウがケモノの臭いを追うと、行く先々で、矢立さんに書かせたコトバを読み上げるように、頼んでどこかへ行ったとわかります。

取金教授にも、渡さんにも、詩のじいさんにも、短歌の父ちゃんにも、イナゴさんにも、おりつさんにも、佐藤さんにも、角ちゃんと明智さんにも、植ちゃんにも、大工の新さんにも、方向オンチの道に迷っている人にまで、紙に書かれたコトバを読み上げさせます。

もう、弟くんは、ダイジロウがどこへ行くか、わかります。

ダイジロウが臭いを追って、最後にたどりついたところは、病院でした。

病室に着くと、ケモノはコトバの力を使っていました。

「アケミちゃんのとて治るのが難しい病気はきっと治る」

そのコトバをケモノがいうと、ケモノの口から淡く輝く雲が出て、ベッドで寝込むアケミちゃんところまでふわふわと浮いて、アケミちゃんに触れて全身を優しく包み込むと、消えました。

「アケミちゃんのとて治るのが難しい病気はきっと治る」

「アケミちゃんのとて治るのが難しい病気はきっと治る」

「アケミちゃんのとて治るのが難しい病気はきっと治る」

「アケミちゃんのとて治るのが難しい病気はきっと治る」

ケモノは、立て続けにコトバの力を使います。そんなに使ったら、大変です。

「もういいよ、ケモノ」

ケモノは弟くんのコトバなど聞きません。

食べてためたコトバを使い切ったのか、今度は矢立さんが書いた紙を、バリバリとケモノは食べ始めました。

「アケミちゃんのとて治るのが難しい病気はきっと治る」

また、コトバの力を使いました。

「.....アケミちゃんの.....とて治るのが.....難しい病気はきっと治る」

自分がしゃべったコトバを、ケモノは吐き出しそうになりながら、汚いうめきをもらしながら、食べました。

「.....アケミちゃん.....のとて.....治るのが.....むずか.....しい病気は.....きっと治る」

ケモノが吐き出したそのコトバの力の雲には、もうあの淡い輝きはありません。それでも、雲はふわふわと浮いて、アケミちゃんに触れると優しさを忘れないように、包み込みました。

「.....アケミ.....ちゃんの.....とて治るのが.....難しい.....病気はきっと治る！」

ケモノはまた、自分のコトバを食べようとします。

弟くんは、ケモノを止めなくてはと、思いました。

「もう、いい。もういいんだ」

ケモノを押さえつけて止めようとしても、ケモノのどこにそんな力があつたのか、弟くんを突き飛ばしました。そのせいで、弟くんのメガネが飛び、レンズが割れてしまいました。

「ケモノは.....オウトクンを.....元気に.....するために来たんだ.....アケミちゃんがピョウギが.....治らないと.....心配して.....元気じゃなくなるんだ」

弟くんは、自分がアケミちゃんのことを心配しすぎて、元気がなくなっていたように、ケモノには、見えていたと今、はじめて知りました。

コトバをしゃべろうとするケモノに、ダイジロウは「ワンワン」と、ほえました。

その「ワンワン」の意味は、弟くんには、ケモノが食べて翻訳してくれなくても、わかりました。

ダイジロウのコトバで、コトバの力を使ったケモノは、もうへとへとです。

「アケミちゃんのとても治るのが難しい病気はきっと治る」

ケモノはいつの間にか、やってきたミナ子さんのコトバをつかむと、食べ始めました。

弟くんは、なんてことをさせるんだと、ミナ子さんを見ました。

ミナ子さんは、ハラハラと涙をこぼしていました。

今まで自分がいったコトバが、ウソになっていくのが耐えられなかったのです。

「……アケミちゃんの……とても治るのが難しい病気は……きっと治る」

力強く、そういつて、コトバの力を使うと、ケモノはついに、つかれはててたおれました。

ダイジロウがかけより、ケモノの顔を舐めました。

「やあ、こんなところにいたのか」

病室に、いきなりイサオ叔父さんがやってきたので、弟くんは驚きました。

ヒゲをたくわえているのは前と同じですが、日焼けして顔の色が変わっています。

でも、イサオさんであることは、間違いありません。

どうやら、イサオさんは弟くんの家にいるのが、待ちきれず、弟くんを探して、ここまでやってきたのです。アワテンボなんですね、イサオさんは。

「これはいけない。ケモノはコトバを使い果たしている。これは急いでコトバの国に帰らないと、大変なことになる」

そういうと、ケモノを優しく抱え上げ、病室からすぐ出ようとしませんが、ミナ子さんを見ると、「ミナ子さん、何を泣いているんです？ 泣いていると美人が台無しですよ」と、一声かけると返事も聞かずに、出て行きました。

ミナ子さんは「人の気も知らないで、何よ」と思いました。

でも、イサオさんにまた会えて、嬉しかったのです。

そんななか弟くんは、アケミちゃんに近寄り、様子をうかがいました。

アケミちゃんは、とても苦しそうに寝込んでいます。

弟くんはなにかにすがるように、祈るように思わずこう言いました。

「アケミちゃんの、とても治るのが難しい病気は、きっと治る」

すると、苦しんでいたはずのアケミちゃんは、急に楽になったように、微笑みました。

それから、町ではいろいろ、ありました。

突然に弟くんのおばあちゃんが亡くなったこと。

渡さんと矢立さんが結婚したこと。

その他にもいろいろあったので、とても、書ききれません。

弟くんは、イサオ叔父さんを追いかけるために、旅立つミナ子さんに、ケモノへの手紙を渡しました。叔父さんがいるはずのコトバの国へまず行くので、ついでにケモノと会うはずだからです。

町であったことを、たくさん書いて、最後にこんなことを書きました。

「もし、ボクにコドモが出来て、
コトバをしゃべるようになったなら、
文字を書けるようになったなら、
ボクにコトバの持つ、
魔法の力を教えてくれたように、
コドモに教えにきてくれないかな」

そんなコトバを手紙に書いてから、何年が過ぎたでしょう。

駅員だったお父さんと交代するように、弟さんは駅員になりました。

弟さんには、奥さんができて、コドモさんもできました。

そのコドモには、お兄ちゃんの名前をつけました。

その子がコトバをしゃべれるようになったとき。

その子が文字を書けるようになったとき。

コトバの国から、ケモノが弟さんのところに、やってきました。

弟さんが、奥さんとコドモさんと家にいるとき、誰かが戸を、開けて入ってきました。

それは、すっかり年老いたケモノでした。

あの真ん丸い目は、変わらずに黒いままです。

コドモさんは、コドモさんにとって「変なの」なはずなのに、ケモノに近寄りました。

「わあい」

コドモさんは、何かわからない、その「変なの」を抱きしめました。

懐かしい思いがこみあげてきて、ただ、抱きしめれば、いいと思ったからです。

ケモノは抱きしめられながら、こういいました。

「約束のこと、しにきたよ」

「あのね、

みんなね。

生まれてくるとき、
約束をして、
生まれてくるんだよ」

「命を繋いでも、
いって約束したから、
生まれてきたんだよ」

「でも、
命を繋げられなくても、
命を助けることができたなら、
約束がまもれるんだよ」

弟さんは、お兄ちゃんのことを思い出していました。

あのあと、いくら、探しても、お兄ちゃんの手紙は見つかりませんでした。

でも、いいのです。

お兄ちゃんは約束を、ケモノを介して、守ったのです。

弟さんは、ちょっと涙をこぼしながら、ケモノに近寄りました。

隣の奥さんを見ると、奥さんもちょっと、涙をこぼしています。

弟さんは、コドモと一緒にあって、ケモノを抱きしめました。

奥さんも、一緒にあって、抱きしめました。

みんな、みんな、コトバを食べる、ケモノを抱きしめました。

